



# IUFRO-J NEWS

No. 99 (2010.3) —

## 2009年 IUFRO 理事会報告

東北大学 中静 透

2009年のIUFRO理事会は、10月15～17日、アルゼンチンのブエノスアイレス市で行われた。FAOが主催する第13回世界森林会議（World Forest Congress）が当市で開催される直前に会議を設定してあった。今回は2010年に韓国でおこなわれるIUFRO世界大会の前には最後の理事会になる。決定の内容は、IUFROニュースに掲載されるので詳細はそちらにお任せし、重要な議題と考えられる点について述べておく。

会議に先立ち、ホストであるアルゼンチンのIUFRO関係者を代表してGerhard Mannsberger氏、FAOの副代表Jan Heino氏、ICRAFのAugust Temu氏、それにIUFRO会長のDon Koo Lee氏の紹介と挨拶があった。

### 1) 緊急の重要課題に関する討議

WFCで、IUFROが“Emerging Issues in Forest Science”というセッションを提案していたので、その議論の方向をこの時点であらかじめすこし議論したいということであった。IUFROのレビューパネルが、あらかじめ、気候変動、生物多様性、バイオエネルギー、水問題という4つをIUFROが研究として関係する重要課題としてリストしていたが、まずこれらのほかに重要な課題があるかという議論を行った。その中で、新しい森林資源の探索、森林と人間、という二つのテーマが重要ではないかという提案があり、それも含めて議論が行われた。

さらに、それらの6つの分野に関して、IUFROとしてどのような貢献ができるのか、という議論が行われ、それぞれについて意見が述べられた。この場で具体的な

行動計画を策定するところまでの結論は出さなかったが、WFCでの議論や今後の議論をへて、IUFRO新戦略など具体的なアクションに移される。

### 2) 組織・会計など

規約や組織の一部改正、会計報告と予算などがいずれも原案通り承認された。

### 3) 各Divisionからの報告

各Divisionからの報告が行われ、了承された。ここ数年間問題となっているのは、あまり活動が活発でないセクションをどのようにするかという点であり、事務局でも活動状況に関するチェックリストを作成している。いくつかのセクションで廃止やリーダー交代などの報告があった。

### 4) タスクフォースからの報告

伝統的知識、森林と健康、科学と政策のインターフェース、違法伐採、コミュニケーション、GMO、炭素吸収、森林と水、絶滅危惧種と保全の各タスクフォースから、ワークショップなどの行事や出版予定などについての報告があった。絶滅危惧種と保全のタスクフォースは廃止することが了承された。

### 5) 特別プログラムからの報告

途上国特別プログラム（SPDC）、世界の森林と社会・環境（WFSE）、全球森林情報サービス（GBIS）の活動について報告があり、アクティブに活動しているという評価で了承された。

### 6) IUFROの2010～2014年戦略について

研究面での戦略と組織面での戦略を分けて考えること

が了承された。研究面では、1) で議論した4つの問題をkey issuesとしてアクションを進める。今回の議論で提案された2つの問題については、サブテーマとして位置づけ、具体的な行動も模索する。

組織の戦略としては、CPFのパートナーとして、世界の森林政策にかかわる活動を強めてゆくことが強調された。新戦略については今後の意見聴取をへて、2010年の世界大会で採択される。

#### 7) 2010年のIUFRO世界大会について

韓国の実行委員会から、準備状況について説明があった。テクニカルセッションには150以上の応募があり、現在120が採用、最終的には140~150ほどが採用される見込みである。参加費は、650~750ドル、学生250~350ドル、3000人ほどの参加を見込んでいる。エクスカージョンには、韓国だけでなく、日本、中国、モンゴルなども予定。

#### 8) 2010年からの新しい理事・学会賞などについて

2010年の世界大会で交代する新しい理事の候補が示

され、投票のうえ、国際評議員会への推薦者が決定された。選出においては、性別や出身地域が重視された。残念ながら、日本からの次期理事選出はなかった。各種学会賞の受賞者も授賞委員会から推薦があり、推薦者を決定した。世界大会で授賞式が行われる。

以上、おおむね予定通りの日程で会議が終了した。今回は、WFCの開催に合わせての理事会であったため、エクスカージョンなど多くに予定されておらず、会議終了後は、それぞれがWFCの行事に参加されたようである。

2010年以降は、日本から理事会への直接参加はなくなる見込みであるが、Lee現会長は日本の引き続きの貢献を強く期待しておられた。Divisionのサブコーディネータには、現在3人の日本人研究者がおられるので、引き続きIUFROとの連携を強めるべく活躍をお願いしたい。

## IUFRO 「Asia and the Pacific Forest Products Workshop- Green Technologies and Products for Climate Change Mitigation and Adaptation」に参加して

森林総合研究所複合材料研究領域 塔村真一郎

### 概要

Asia Pacific Association of Forestry Research Institute (APAFRI)が主催する林産関係のワークショップが2009年12月14日~16日の3日間、スリランカのコロomboの北約50kmにあるMarawila地区のClub Palm-bayホテルで開催されました。APAFRIとはIUFROの中のthe IUFRO Special Programme for Developing Countries (SPDC)との関わりが深いアジア太平洋地域に特化した組織であり、本部はマレーシアのForest Research Institute Malaysia (FRIM)にあります。今回のワークショップにはアジア太平洋地域の11カ国から35名の参加者がありました。初日は3つの基調講演と7件の口頭発表、中日はフィールドトリップ、最終日は12件の口頭発表とパネルディスカッションが行われました。今回のテーマは気候変動緩和のためのグリーンテクノロジーであり、同日にコペンハーゲンで開催された

COP15を意識したテーマとなりました。炭素排出量の削減に向けて、木材やその他の林産物資源を効率的かつ持続的に活用し、これらの森林資源を環境への影響を軽減しつつ、ビジネスとして経済活動に組み入れていくことが大事であるという共通認識のもと、その橋渡しとなるグリーンテクノロジーやグリーンエネルギーと呼ばれる、いわゆる再生可能資源の利用技術やエネルギー変換技術を今後どのように展開していくか?、がメインテーマでした。参加した国や地域の各機関が、気候変動に対処する林産物の取扱いと利用に関する現状と問題点、グリーン製品技術に関連する経験と知識を紹介しあい、各国の研究者と有益な情報交換をすることができました。

### 基調講演

初日は韓国の金氏 (KFRI), IUFRO, Division5 (林産部門) コーディネーターのCown氏 (ニュージーラン

ド森林研究所 Scion), APAFRI 会長の Latif 氏 (FRIM), ホスト国スリランカの Fernando 氏による挨拶に続いてスリランカ国歌演奏, キャンドルへの点火セレモニーが行われました。その後基調講演が3件, まず「気候変動緩和と適応のためのグリーン技術」と題して Cown 氏から, 森林の役割は1) 木材生産, CO<sub>2</sub>の吸収, 2) 木材の利用, CO<sub>2</sub>固定, 3) 石油資源を守り持続可能なエネルギーを使う, の3点あること, 温暖化の影響やCO<sub>2</sub>と気候異常の関係は地域差も大きいためにはっきりしないが, 特にペストなどの疫病, 火災, 風雨災害などのリスクは確実に増えるはずであるし, 林産業への影響も大きいと思われること, 炭素固定の点で考えると1m<sup>3</sup>の木材を使うと1トンのCO<sub>2</sub>排出を抑制することになること, 人工林はバイオエネルギーにも重要であり, 森林破壊を防ぐことが緊急の課題であり, 炭素固定のための多層木構造物の研究も進んでおり, LCA 的な研究も有利に働き, グリーン技術は今後ますます重要度を増して来ることなど, 林業・林産研究の方向性について紹介がありました。また, IUFRO の設立理念である科学に基づく国を超えたパートナーシップの拡大を今こそ有効に活かすべきとの提言がありました。続いて「バイオ燃料 - 気候変動の人道危機を緩和するためのグリーンエナジーというオプション」と題してスリランカ Wickramasinghe 氏から発展途上国のプランテーション作物とバイオ燃料の現状と将来のあり方について, また

「東南アジア木製家具製造業でのグリーン製造基準」と題して マレーシアの Ratnasingam 氏より, それぞれ講演がありました。

#### 口頭発表

初日の昼食後, 「グリーンテクノロジー」のセッションでは, マレーシアの木質複合材料からのホルムアルデヒド放散の問題, タンニンレゾルシノール樹脂接着剤の竹積層板製造への可能性, 木質系バイオマス廃棄物の液化技術と木材接着剤への応用(筆者), マレーシアでの木材廃棄物の活用, 高品質活性炭としておがくず廃棄物の活用の可能性, マレーシア木製家具メーカーにおけるエネルギーの効率的な製造法, パプアニューギニアの木材加工状況と課題, の7件の発表がありました。

また, 3日目の午前中に「グリーン製品」のセッションが行われ, ネパールのコミュニティ森林における持続可能な収穫と付加価値 MAP, インドネシア Neem 木(農薬に頼らない害虫に強い薬木)の役割, フィリピンのマニラエレミ(ヤニから作られるオイル)のための Canarium 木の改良法, 木材乾燥のためのおがくずバーナーの設計と開発(スリランカ), 生体繊維材料生産のためのジュート利用(バングラディッシュ), インド西ベンガル州における気候変動への非木材森林製品の適応策の実証的研究, 竹のグリーン材料として保存森林(マレーシア), ポリプロピレン充填複合材料への竹ファイ



写真-1 参加者全員による記念撮影(最前列右6番目 APAFRI 会長の Dr. Latif 氏, 右隣に KFRI の Dr. Kim 氏, Div. 5 コーディネータの Dr. Cown 氏, 筆者は最後列右端)(会議の詳細は <http://www.apafri.org> 上でご覧になれます。)

バーの利用（韓国）、*Dendrocalamus strictus*（インド実竹）の利用と可能性、の計9件の発表がありました。最後のセッション、「バイオエネルギーとバイオ燃料」では、インド西ヒマラヤ地区の薪炭材排出とCO<sub>2</sub>の軽減戦略のケーススタディ、気候変動の影響を軽減するためのジャトロファの種子の栽培（インド）、銅クロムホウ素保存処理による代替木材種の利用（スリランカ）の3件の発表がありました。

#### パネルディスカッション

最終日に Cown 氏を座長としたパネルディスカッションが行われました。Hiran 氏（スリランカ）、Rawat 氏（インド）、Ratnasingam 氏（マレーシア）、Ella 氏（フィリピン）の4名がパネリストとして議論を開始し、気候変動への対応策をどのように世論にアピールしていくかを中心にフロアからも意見が交わされました。研究だけで終わらないコストを重視した実用化研究の必要性や産業がないが森林資源を有している田舎の人々の生活向上と活性化を兼ねた新しい環境ビジネスの開発が必要になるとの意見がだされました。また、木材の伐採や利用に関しては、違法伐採取り締まりや森林認証制度の活用の徹底を訴える一方で、認証に係る多大な経済的問題について、発展途上国側からはこれらの負担を強く先進国

側に求める意見も出され、一時は同時刻に行われていた COP15 での議論のようになりましたが、それら政治的なアピールはさておき、われわれ研究者としては、われわれにできること、すなわち今回のテーマとなったグリーンテクノロジーやエネルギーに関する科学的なデータの蓄積と検証、技術開発などを地道にやっていくことが重要であるとの認識を共有しました。

#### フィールドトリップ

2日目早朝にホテルを出発し、終日バスツアーでした。はじめに、木製の手工芸品工場、籐家具工場やゴムの木を加工したブラシの工場を見学しました。大半は日本向けの製品だそうで、日本でよく目にする籐家具やデッキブラシが、スリランカの小さな町工場で大量に作られているのが不思議な感じがしました。午後からは、象が80頭近くもいるサンクチュアリの見学と環境保護のレクチャーを受け、夜には首都コロネポ市内のショッピング街を訪問しました。スリランカの道路は左側通行ということもあり、路上で見かけたほぼ9割以上が中古の日本車で驚きました。しかも、〇〇産業、〇〇建設、〇〇幼稚園などの社名やロゴがそのままついているトラックやバスなどがほとんどで、思わず苦笑しました。

## IUFRO 「11<sup>th</sup> International IUFRO Wood Drying Conference-Recent Advances in the Field of Wood Drying, Skellefteå Sweden 2010」に参加して

森林総合研究所 加工技術研究領域 小林 功

#### 概要

IUFRO Wood Drying Division (5.04.06) が主催する木材乾燥に関するワークショップが2010年1月18日～22日の5日間、スウェーデン王国の北部にある Skellefteå（シェレフテオー市）の Luleå University of Technology Skellefteå で開催されました。スウェーデンの中でも比較的北部に位置するシェレフテオーは北緯64度38分にあり、この時期、日の出は9時頃、日没は14時半頃です。晴れていても15時頃にはもう薄暗く、曇って入ればなおさらです。体が眠りから覚めきる前に暗くなってしまうのか、時差ボケが残ったまま5日間

が終わったような気がします。

今回のワークショップには、28カ国から106名の参加者がありました。初日は参加登録とレセプションがあり、1月19～22日に3件の基調講演と40件の口頭発表、18件のポスター発表がありました。1月20日午後には Skellefteå から南へ約50kmにある Martinsons 製材工場へ、バス2台を連ねてイン・カンファレンスツアーが行われ、1月22～24日には希望者を対象としたポスターカンファレンスツアーがありました。

今回のテーマは木材乾燥分野における近年の研究・技術の発展です。開催地が北欧と言うこともあって欧州か

らの参加者が多かったのが印象的です。

### 基調講演

19日の基調講演はルーマニアの Mihaela Campean 教授 (TRANSILVANIA University) による 16 世紀初頭から現在までにいたる木材乾燥の歴史について、20日はフィンランドの Jarl-Gunnar Salin 氏による木材乾燥モデルに関する研究の歴史と展望、21日はアメリカ合衆国の Michael R. Milota 教授 (Oregon State University, IUFRO Division5 木材乾燥部門コーディネータ) による木材乾燥研究全体の未来への展望についての講演でした。3つの基調講演では、いずれも過去から現在、そして未来に広がる可能性が語られ、木材乾燥にはまだまだ多くの課題があり、新たな技術の開発が求められていることを強く感じました。

### 研究発表

口頭発表は7つのセッションに分かれ、各セッションのテーマと件数は以下の通りです。

	セッション	テーマ	発表 件数
口頭 発表	1	Drying Quality and Wood Properties	6
	2	Methods for Monitoring the Drying Process	6
	3	Physics of Wood Drying: Modeling	4
	4	Applied Wood Drying	8
	5	Alternative Drying Methods	4
	6	Wood Modification Related to Drying	7
	7	Miscellaneous Drying Technologies	5
ポスター			18

発表内容は水分移動と変形、割れのモデリングといった木材乾燥の基礎理論に関わる発表から、実際の製材工場の乾燥機を用いた装置内風速の最適化についての報告のように現場での応用を強く意識した試験研究など、多岐にわたっています。中でもサーモウッドなどの熱処理に関する発表は7件と比較的多かったように感じます。サーモウッドはフィンランドで開発・普及が図られており、いわばお膝元ですから発表が多いのも当然かも知れません。期間中に行われた大学施設の見学でも、サーモ

ウッドを使ったコンセプトハウスを見学しました。

### インーカンファレンスツアー

1月20日午後に行われたツアーでは、Martinsons 製材工場へバスで移動し、丸太からラミナの製材ラインと集成材の製造ラインとを見学しました。

Martinsons 製材工場は、シェレフテオー市内から約50km南に位置する製材工場で、製材から住宅や木橋、木造ビルディングなどの大規模構造物の建築まで行う Martinson グループに属し、その製材部門を担当する企業です。欧州でも最も進んだ製材システムを持っているとのことです (<http://www.martinsons.se/default.asp?id=24256>)。製材ラインは丸太からラミナに挽き、選別してラミナのまま出荷するものと集成材にして出荷するものとに分けます。日本へも輸出しているそうです。そう言われてみると、スウェーデンからの輸入住宅を地元の住宅展示場で見たことがあると思い出しました。「ここから来ていたのか……」と思うと、ちょっと不思議な感じでした。

丸太の製材ラインは最大150m/分で製材できるのですが、丸太が凍っている場合は速度を落として製材できるようにしているとのことでした。冬場には最高気温が-20℃以下になることもある北欧ならではの仕様です。この日は100m/分で動かしているとのことでした。

### 国際学会に参加しての感想

ある参加者とサーモウッド関連の発表について話していたとき、彼が「どうして、変色や劣化などの問題が起きるのに、わざわざ熱処理するのか分からない」と言っていたのが自分には非常に印象に残りました。日本でもスギ材の高温乾燥が広まって久しいですが、彼が日本の製材・乾燥の現場を知れば同じ疑問を持つでしょう。もし、私が同じ質問をされたなら、心持ち材を使ったりあるいは表面割れを嫌う日本独特の価値観、つまり歴史的・文化的背景から説明せざるを得ないように思いません。しかし、そういった説明はあまり合理的ではありませんから、彼を納得させることは難しいかも知れません。

欧州のサーモウッドやその他の熱処理の場合も、耐久性の乏しい樹種や害虫の存在、あるいは材色に関する考え方の文化的な違いなど、それぞれの地域に独自の背景もあるのかも知れません。そういったことは現地の研究者との議論だけではなく、製材現場や実際に使われている木材の特性、使用環境、木材に対する文化的価値観な

どについて知ることによって理解できるのだらうと思います。海外で先行している技術の導入や、あるいはそれを自分の研究の参考にする際にも、その技術の本来の意義を知っていることは重要です。現在はネットで多くの情報が得られますから、わざわざ国際学会に参加する意義も小さくなったのかも知れませんが、しかし世界の研究者と直接、議論し、海外の文化に触れ、そこにある技術の本来の意義を知ることのできる機会として、国際学

会への参加に大きな意義があると改めて感じました。

なによりも、「世界を見渡せば、こんなにたくさんの木材乾燥の研究者がいる」、という発見は素直に感動しますね。

次の大会はブラジルで行われるそうです。今回は寒さを極めたような気がしますが、次回は暑さを極めることになるのでしょうか……。ま、それはそれで楽しみです。



(Photo by Michael Jacobsson)

参加者による記念撮影。最後列中央に今大会のコーディネータ Tom Morén 教授、筆者は最後列中央からやや左寄り。背景は会場近くのシェレフテオー川。たぶん凍ってました（足跡はありませんでしたが）。

なお、写真の使用についてはカンファレンス事務局、Dr. Margot Sehlstedt-Persson 氏からご快諾をいただき、オリジナルファイルを使わせていただきました。ここにお礼申し上げます。（会議の詳細は <http://www.wdc2010.org/> でご覧になれます）

## 第 18 回 IUFRO 世界大会への参加登録

2010 年 8 月 22 ～ 28 日に大韓民国ソウル市で開催される IUFRO 世界大会への発表申し込みは 2009 年 12 月に締め切れ、2010 年 2 月に採否の連絡がありました。発表申し込みが受理された人も、2010 年 4 月 30 日

までに、オンラインレジストレーション（参加登録と参加費の払い込み）をする必要があります。

大会 Website <http://www.iufro2010.com/>

## 事務局からのお知らせ

### 1. IUFRO-J 平成 22 年度機関代表会議のご案内

第 121 回日本森林学会大会が筑波大学で 2010 年 4 月 2 日（金）～ 5 日（月）の日程で開催されます。それにあわせて表記会議を開催致しますので、機関代表者の方のご参加をお願いいたします。

日時：2010 年 4 月 4 日（日） 12：15～12：45

場所：筑波大学 総 A107 会場

議題：会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算など

代表者会議で取り上げるべき議題がございましたら、事務局主事（藤間）宛ご連絡願います。

### 2. IUFRO-J News, メールニュースへの寄稿のお願い

IUFRO-J News, メールニュースの内容を充実させるため、IUFRO 研究集会の開催予定や内容紹介、森林・林業・林産業に関連する研究機関の情報等、会員で広く共有したい事項について記事をお寄せ下さい。会員相互の情報交換の場として「IUFRO-J News」「IUFRO-J メールニュース」をご活用下さい。

## IUFRO-J News 発行の経緯

(J-News 第 1 号 1977 年 1 月より再録)

### IUFRO-J NEWS の発行について

第 16 回オスロ大会において、つぎの大会が日本で開催されるように決定されたことは、IUFRO 加盟機関の皆様はすでに、ご承知のとおりですが、オスロ大会の出席者の帰国報告を総合すると、この大会運営はなかなか困難な問題があるように思われる。

しかしながら、日本で引き受けた以上、IUFRO-J としては積極的に各国の要望に応えなければならない、そのため速にその対応方針を確立して準備にはいりたいと考えている。

とくに日本は米国について、第 2 位の 27 機関、746 名におよぶ大加盟国であり、またアジアで開かれる初めての総会には、各国は相当な期待と関心をもっている。

このことをふまえて、国内体制を確立するための一つの手助けとして、昨年 11 月 IUFRO- 国内委員会 (IUFRO-J) が設定され、本年なかばの幹事会で、IUFRO-J NEWS の発行が求められた。

IUFRO-J NEWS は加盟機関・研究者間の情報誌として、IUFRO 本部からの連絡事項、J の活動および加盟機関の研究活動状況等についての情報交換を行うのが主たる目的であって、刊行事務は林業試験場（事務局）が担当することになっている。

したがって、加盟機関等で周知すべき皆さんに知ってもらった方がいい事項があれば、その都度原稿をお寄せ願って逐次刊行していきたいと考えている。

また大会対策として近日中に林野庁内に、同庁と林試を中心とした委員会を設置して、準備態勢にはいることを予定している。

J としてもこの委員会にどのように接触し、関連して行くか、幹事会等において十分協議を重ねていきたいと思っているので、よろしくご協力をお願いする次第である。

（議長・林試場長 上村 武）

## 国際森林研究機関連合—日本委員会会則

### (名称と目的)

第1条 本会は、国際森林研究機関連合—日本委員会（略称をIUFRO-Jとする）と称し、国際森林研究機関連合（以下IUFROと呼ぶ）の目的に沿って、その事業に協力するため、国内の森林・林業・林産業に関連する研究機関の相互連携を図るとともに、IUFROに関連する諸活動に貢献することを目的とする。

### (業務)

第2条 本会は、前条の目的を達成するため次の業務を行う。

1. わが国におけるIUFRO加盟機関相互の情報交換の推進および連絡調整
2. IUFROの評議員会への代表および代理の決定
3. IUFROが組織する研究グループ活動の支援
4. その他本会の目的達成に必要な事項

### (事務局)

第3条 本会は、事務局を茨城県つくば市松の里1森林総合研究所内におく。

### (会員)

第4条 本会の会員は、次の4種とする。

1. A会員 IUFRO加盟機関
2. B会員 IUFROに加盟していないが、本会の趣旨に賛同する森林研究機関
3. C会員 A、B会員の機関に所属していないが、本会の趣旨に賛同する個人
4. 賛助会員 本会の趣旨に賛同する機関または団体

### (機関会員の研究者登録)

第5条 A、B会員に所属し本会の趣旨に賛同する研究者は、本会に登録するものとする。登録研究者に異動のあった場合は、その都度事務局に連絡する。

### (会費および会計)

第6条 会費は次のとおりとし、毎年度のはじめに納入するものとする。A、B会員の会費は、当該年度4月1日におけるその機関の登録研究者数に応じた額（1人当たり年額1,000円、但し学生会員は500円）とする。ただしB会員については、定額制（年額1口5,000円を1口以上）をとることもできる。C会員の会費は年額1,000円とする。賛助会員の会費は年額1口10,000円を1口以上とする。

第7条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第8条 本会の予算および決算は、機関代表会議に提出して、その承認を受けるものとする。

### (役員)

第9条 本会に、次の役員をおく。

- |    |                  |
|----|------------------|
| 議長 | 1名               |
| 幹事 | 若干名（うち1名を幹事長とする） |
| 監事 | 2名               |
| 主事 | 1名               |

第10条 議長は本会を代表し、会務を総括する。幹事は、会務執行に関する事項を審議し、幹事長は会務を執行するとともに議長を補佐し、議長にさしつかえあるときはその職務を代理する。監事は、会計および会務執行の状況を監査する。主事は幹事長の職務を補佐する。

第11条 役員の出選方法は、次のとおりとする。議長、幹事および監事は、機関代表会議で選出し、幹事長は、幹事の互選とする。主事は議長が委嘱する。

第12条 役員任期は、2ヶ年とし、再任を妨げない。任期中に欠員のできた場合は幹事会において選出し、次期機関代表会議で承認をえるものとする。欠員を補充するため選出された役員任期は前任者の任期の残りとする。

### (会議)

第13条 会議は、機関代表会議および幹事会とする。

第14条 機関代表会議は、A、B会員それぞれの機関で選ばれた代表（1名）で構成する。通常毎年度頭初に開くこととし議長が召集する。機関代表会議では、会務報告、予算、決算の承認、第2条2項等会の重要事項を審議決定する。

第15条 幹事会は、議長および幹事をもって構成し、議長が召集する。幹事会には、議長の指名する者を参加させることができる。

### (その他)

第16条 本会々則の変更および本会に関する重要事項は、機関代表会議で決める。

- 付則
- 1) 各機関に連絡員をおき事務局に登録する。
  - 2) 本会則は昭和54年4月7日より施行する。
  - 3) 昭和57年6月24日一部改訂（第6条 学生会員の会費）

IUFRO-J News No. 99 平成22年3月16日

国際森林研究機関連合—日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@fpri.affrc.go.jp

[編集・発行]